

題　　言

昔から“千里の馬は常にあれども伯樂は常にあらず”，という諺がある。この言葉は、単に本来の意義において譬喩の妙を極めているばかりでなく、これを凡百の事象に当て嵌めてみても、常に新たな意義と適切な示唆を与える。また時には辛辣な諷刺ともなり冷厳なる教訓ともなつて身に迫るものあるを感ずる。

すなわちこれをわれわれの仕事の領域に引用して考えてみても、不断の進歩発達を特質とする“科学”の分野において学問及び技術の向上発展真に瞠目すべきものがあるにかかわらず、なお且つ未知の世界の餘りに多くして而もこれを解明する伯樂の如何に少いことであろうか。

由来発明発見の如き前人未踏の処女地を開拓することの困難さは固よりいうを俟たないが、併しながらこれをわが衛研の業務の上について反省してみても、曩に発見したボトリヌスE型菌の如き最初日本海岸の島野村に起つた食中毒事件によつてこれを究明したのが、わが邦における第一例として世の注目を惹いた訳であるが、次いで発生したオホツク海岸及び網走湖畔においても同様の菌を検出し、更にその後保健所等について聞く所によればこれ等の地方と遠く懸け離れた土地においても過去において“飯だし”による相当数の食中毒例があり、而もその症状から推して恐らく最近発見のものと同様の毒素に因るものと想像される点の多いところから見ても、この菌の分布が必ずしも既に証明された地方のみに限られたものと断じ得ないように考えることも、あながち無稽の臆測として退ける訳には行かぬようと思われる。

思うてここに至れば、地方における衛生試験研究機関の先達たるべき使命を荷う衛研の責務や真に重且つ大であつて、事にこれに従う者はすべからく有為の伯樂を以て自任し、啻に日常当面の業務の完遂に努めるばかりでなく、進んで未知の曠野に彷徨する千里の馬の発見に懸命の努力を払う気概がなければならぬ訳である。

幸い去る2月を以て新たに迎えた道衛生部長稻垣是成博士は、医家として多年保健衛生等の行政に執掌された経験を持たれた科学の擁護者であつて、その豊富な経験と深き理解による懇篤なる指導鞭撻とは、われわれ衛研を守る者の胸に無限の光明と希望とを与え大いに活気づけられていることは、所員一同の欣喜に堪えないところであつて、深い敬意と感謝とを禁じ得ないものである。

茲に第5集の刊行に際し、平素直接間接協力支援を惜しまれざる大方諸彦に対し、衷心感謝の意を表すると共に、所員の労苦を多とし更に一段の発奮努力を期待して歓まぬものである、

昭和28年3月下旬

北海道立衛生研究所長 中　　村　　豊